

キューバの山岳住民の定住化策とエコツーリズム展開

糸長浩司

日本大学生物資源科学部教授

キューバは、共産圏の崩壊と米国の経済封鎖の中で、独自の自給自足的な国づくりに励んできている。特に、ハバナ市のような大都市内での市民ベースでの有機農業展開はめざましいものがある。一方で、中山間地域での環境保全と定住化促進策も歴史的に着実に、革命以後進めてきている。荒廃した山林環境の再生を地域社会の維持とあわせて取り組んでいる。その経済的活性化策として、エコツーリズムを掲げている。ここでは、筆者の2002年10月でのキューバ現地調査を元に報告する。

キューバのような厳しい状況下で、かつ厳しい山間地域での環境・社会・経済の三位一体的な活性化の方策として、学ぶべき点は多くある。特に、エコツーリズムのあり方、その方向性を考える上では参考となる。

1) サス・テラスの荒廃の歴史

ラス・テラスは、キューバ東部のピナル・デル・リオ東部にある5000haの国立公園であり、このエリアを含むロス・ラザリオ山地は25000haのバイオ・スフィア・リザーブ地域（生物圏保全地域）に指定されている。その中で、エコツーリズムが展開されている。ここが、キューバのエコツーリズムの「メッカ」になるまでの歴史は、キューバの侵略・開発・革命・自然再生保全型コミュニティ形成の歴史を物語っている。

最初の侵略・開発はコーヒー農園開発である。19世紀の初頭に、ハイチから奴隷を連れてフランス人たちがやってきて山中にコーヒー農園を切り開いた。そこで働く労働者も移住してきた。それから30～40年間は、プランテーションによるコーヒー生産が盛んとなった。しかし、開墾型のコーヒー生産方式は、降雨時の土壌流出を招き、生産量は急激に落ちてくる。更に、1844年と46年には大きなハリケーンの被害もあった。キューバ以外でのコーヒー生産が増加したので、サトウキビの生産もキューバでは盛んになってきた。ブラジルコーヒーが米国で輸入するようになり、結果的に、この地域のフランス人のコーヒー生産者はコーヒー生産を中止した。その代わりに、フランス人、経済的、社会的支援を断たれた労働者達は木を伐採しはじめた。彼らは炭生産で生計を立てていた。このような収奪型の土地利用、森林破壊がほぼ100年間続いた。丘陵地帯の森林はコーヒー生産や樹木の継続的な伐採により、土壌流出が続き、住民の生活水準も低く地域全体が荒廃していた。

2) 革命後の大規模な植林プロジェクト

コロンブス時代はキューバ国土の95%は森林であったが、森林開発により1902年時は50%に減少し、1958年までのサトウキビ生産ブームで森林面積は14%に減少したという。1959年のキューバ革命後に再植林の運動が熱心に進められた。国営の森林センターの全国8カ所設置、森林専門学校、大学での森林技術者育成、全国30カ所の木材管理会社等で、全国的な植林運動が展開され、2001年では森林面積は22.9%に復元している。

このような全国的な森林再生、地域コミュニティ再構築ともいえる全国的な運動の先駆的な試みとして、1968年からこの地域の全面的な植林が始まった。主に木材として使えるマホガニー、ハイビスカス、ユーカリ、チーク、ヒマラヤ杉、松等26種類の木を10年かけて植樹しその数は600万本に達した。混植した樹木が競争しあい、生き残りに負けたものは炭として利用された。植林方法は、土壌流出防止のために、テラス工法を採用した。その方法で再生された地区ということで、この地区をラス・テラスと呼称するようになった。植林テラスの総延長距離は1100kmにも達した。この人海戦術の植林運動には地域の農民だけでなく、ハバナ市民も参加したという。島の東部からもボランティアが毎日何百人も参加したという。その様子は地区センターの歴史博物館の写真で見られ

る。

1971年にキューバ政府は、この地区農民のために人口1200人のモデル・コミュニティの居住地建設を始めた。この建設にも建設部隊が組織され、この建設に参加した人達の一部は、このコミュニティにそのまま残った人もいる。それまで分散居住していた人々の生活水準を向上させるために、一カ所のコミュニティにまとめようとした。テラス状の植林による森林環境再生プロジェクトで農民達の雇用の場を創出し、更に、彼らの居住水準とコミュニティ構築を実現した。21世紀の世界的な課題である、「ローカルレベルでの、環境・経済・コミュニティの持続的な開発・発展としてのローカルアクション」のキューバ版が1970年代の革命後に着実に実践されたといえる。その先駆性を評価したい。

この1968年の植林プラン、モデル・コミュニティ建設のアイデアはオスマン・シエンフェーゴス（キューバ革命のヒーローであるカミロ・シエンフェーゴスの兄弟で、観光大臣である）によって提唱された。現在もこのコミュニティの代表であり、建築家でもあり、その後もコミュニティ地内のモカ・ホテルの設計も行っている。

3) バイオ・スフィア・リザーブ地域指定とエコツーリズム・コミュニティ

ラス・テラス・プロジェクトが成功したため、1985年にユネスコの「バイオ・スフィア・リザーブ」地域の指定を受けた。ここはキューバで一番小さいが第一号である。現在の保存地区は25000haであり、保存地区内には600の高層固有植物と250の低層固有植物がある。内34が自然種である。98種の野鳥が棲み、うち4種はキューバ固有種8種に含まれる。カメやカエルなども多い。森林の保護、研究、保全を求める国際的な規則に従っている。地域内の1,500人住民の約半分がラス・テラス・コミュニティで暮らし、バイオ・スフィアに居住することは制限されている。バイオ・スフィア内で働く住民は、自給自足し、そのエリアの保護、研究そして保全の責任を負う。住民は、1人当たり1匹のブタ以外の動物を所有することを認められていない。この地域には4つの小学校があるが、自然を保護するために子どもたちの役割を強調している。小規模なホテル（モカ・ホテル）は25室の部屋だけで観光客の数を制限している。

1990年代からはただ自然保護だけではなく、歴史・社会を組み込んだプロジェクトが動き始めた。1994年からは持続可能な発展プロジェクトが動きはじめ、キューバ政府による山岳地域での定住化促進計画である「トルキーノマナティ・プラン」とも連動するものである。コミュニティの住民の生活水準を高めるため、経済危機の最中であった1995年から本格的な観光地としての開発が始まる。観光地としてのポテンシャルとして、地域文化、フランス人の開発時代からの歴史等も調査され、観光拠点の一番目としてモカ・ホテルが建設された。観光地として国内利用もあるが、主に外国客をターゲットし、貴重な外貨獲得の場所である。観光収入の3分の1はコミュニティ住民の収益とし、3分の1は観光業発展への投資、そして3分の1はコミュニティ環境創設のための経費として使用されている。

以前には160人程度の農民は山中で暮らしていたが、現在は集住のコミュニティには960人の住民が定住している。小学生は118人。中学生は、83人。2~4歳までの幼稚園児が24人。28人の教師と22人の事務員がいる。コミュニティの51%が女性で70%が就業している。コミュニティ住民の仕事は再植林、教育（小中学校）、文化関係の仕事（リサイクル紙を活用した工芸をする芸術家、4つのミュージックバンド）等である。再植林の仕事は減少しつつあるので、森林整備、枯れた樹木や病気の樹木管理の仕事が出てきている。

電気は国営の配電システムに供給され、上水はダムやコミュニティから8kmほど離れた場所から地下水から供給されている。下水は浄化のためのラグーン（湿地帯）で処理されている。食料自給は野菜、根菜類、コーヒー等は地域内で生産されているが、まだ不十分な状況である。

丘の上のコミュニティセンターには、小さい歴史博物館、映画館、夜はディスコになるコミュニ

ティハウス、その他医療保健機関（ファミリードクター2人、看護婦4人、歯科医2人、歯科技師1人）、小さい図書館、幼稚園がある。コミュニティの基礎単位である革命防衛委員会（CDR）は12あり、ゴミの分別、コミュニティの教育、コミュニティ運営の基礎単位としての役割を依然として果たしている。コミュニティ自治組織は、キューバの他の地域と同様に、ポデル・ポプラー（人民権力）- コンセホス・ポプラーレス（人民評議会）からなり、ここはカンデラリア市（ムニシピオ）内のコンセホス・ポプラーレスである「バニド・ポロ・モンタニャーレス」に所属している。

4) ラス・テラスでのエコツーリズム内容

1990年頃からコミュニティベースでの観光リゾート建設がはじまり、1992～94年の間にモカ・ホテルも造られ、アート・ギャラリーや布織、焼き物のショップも作られた。観光客は年々増え、1999年2万人、2000年22000人、2001年21000人である。2001年はアメリカの同時多発テロの影響で多少減少した。ホテルの年間稼働率は80%であるという。ホテル宿泊だけでなく日帰りの観光コース、サーキット、人工池で魚を養殖し、レクリエーションとしての釣り楽しめる。ホテル建設では、建築専門家、政府グループも従事したが、コミュニティ住民も参加した国のプロジェクトであり、ホテル収益はコミュニティに還元される。

キューバのエコツーリズムのメインセンターとして850名の雇用を産み出している。その従業員はラス・テラスコミュニティに居住している。この地域に行くルートは二つあるが、どちらの入り口にはゲートがある。ラス・テラスでは、エコ・リゾート、芸術、自然散策、19世紀のコーヒー・プランテーション遺産などが楽しめる。また、少し離れたラ・ロマ・デ・タブレット集落という、森が深く頂上が平らであるためゲバラがボリビアに行くまでの訓練をした革命的な場所もある。先に紹介したコミュニティセンターのミニ博物館では、コロンブス以前の様子やプランテーション時代の歴史、革命後の再植林の様子が展示されている。

地域では科学アカデミーと呼ばれる森林保全のための情報提供センターの機能を果たす「エコロジーセンター」があり、そのセンター長は、エコシステムの研究とモニタリングをしており、一人3ドルを払えば、一時間ほど野鳥観察や遊歩道散策のガイドをしてくれる。また、「カフェタル・ブエナ・ビスタ」というフランス人によるキューバで2番目に古い19世紀のコーヒー・プランテーションの場所が保全され、1801年建設の歴史的建造物はレストランとして利用されている。この周囲は一時間ほどハイキングができる道が整備され野鳥観察もでき、3キロメートルほどのところにある「リオ・サン・ジュアン」には小さな滝や自然の水浴ができるプールがある。

尚、本項は吉田太郎氏（東京都農政課職員）との2002年10月のキューバ調査に基づく共同執筆である。



写真 ラステラスの集落風景



写真 湖水でのリゾートも楽しめる

